

家畜の一生

遊牧民は
家畜群と共生して
生きている。
絵画では、
人間の一生とともに
家畜の一生が
展開されている

野生動物の狩猟

遊牧はいかなる原理で
はじまったのだろうか。
遊牧を考えるうえで、
モンゴル人の狩猟活動の理念は
重要なヒントとなる。
動物に依存して生活する人びとは、
生命の再生の重要性を知っている

うち だ とし ゆき
内田 敦之
(財団法人千里文化財団)

家畜の群れを追う遊牧民というイメージが強いモンゴルだが、その狩猟文化はシベリア北方民族の文化の流れをくみ、かつてはきわめて重要な位置をしめていた。狩猟によって得られる食肉は牧畜生産の不足を補完していた。また集団でおこなう巻狩りはその形態、作戦、装備、糧食などあらゆる点で戦闘時の軍事行動と類似し、それがそのまま軍事教練の役割をはたしていた。さらに、ハーンや貴族たちのリクレーションという面をもち、その熱狂ぶりは、オゴデイ・ハーン（1229～1241在位）が耶律楚材（やりつそざい）の進言を無視して病気をおして出獵し、まもなく崩御したという逸話があるほどである。

絵画には家畜たちがあふれている一方、同時にさまざまな野生動物も描かれている。クマ、シカ、

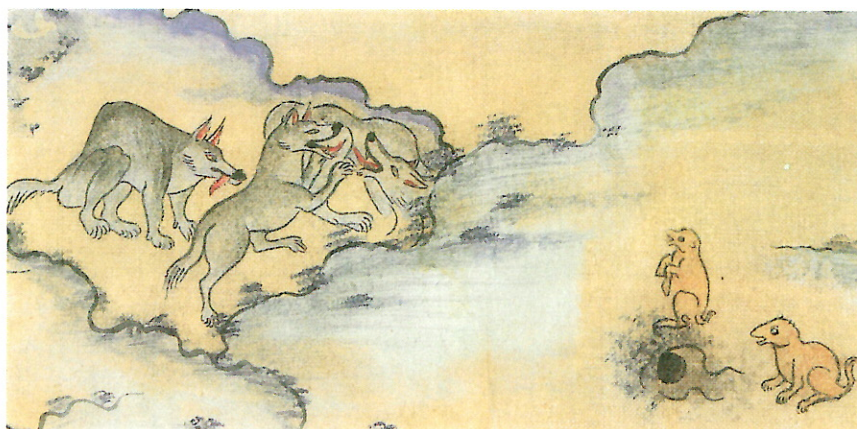
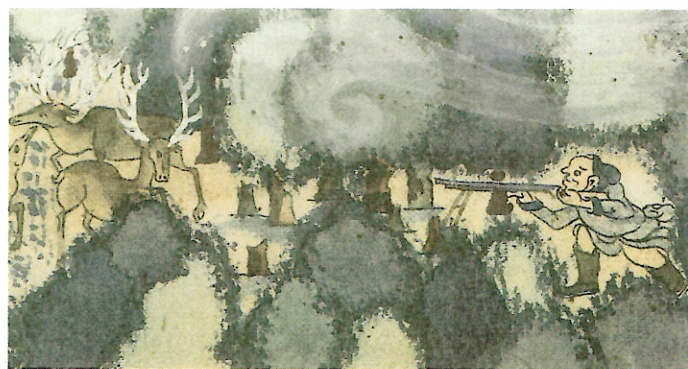
ノロ、トナカイ、ハクチョウ、イノシシ、タルバガ（マーモット）、ゼール（羚羊）、オオカミ……。狩猟の対象は、ほかにミンク、リス、キツネ、ウサギ、ヤマネコ……等々、数十種におよぶという。ここでは比較的大きく描かれ、かつ日本ではあまりなじみのないタルバガ、ゼール、オオカミの猟について簡単に紹介したい。



タカのひなを腕にのせて狩りの
訓練をするカザフ族の老人☆



上 獲物を鞍にぶらさげた狩人の帰宅。その夫人は牛糞拾いから帰る。
 子どもは父親の帰りを喜んでいる
 下 森林地帯の狩猟
 右 しとめた獲物の内臓を野外で焼いて食べるのは、狩猟の伝統である



上 狩人の放ったタカがゼールを倒そうとしている
 左 じゃれあうオオカミを遠くから眺めるタルバガ

●タルバガ

群れで穴居生活をするが、その穴からひょっこり出てきてキョロキョロするしぐさが愛らしい。タルバガの強い好奇心を利用し、ダブダブの白い服を着てボロ布（本来は白いウマの尾）を付けた棒を振りまわして注意を引きつつ近づいて撃つというユニークな狩猟法がある。かつては巣穴から焼きだす方法も用いられたが、現在は禁止されている。チンギス・ハーン時代にはすでに食肉として常用されていた。野外でする料理ボードクは、毛皮を傷つけないよう内臓や肉を取り出して、毛皮のなかに焼け石といっしょに入れ、なかから丸焼きにする草原の珍味である。その内臓は痔や糖尿、脂肪は関節炎、腰痛、花粉症などの治療に用いられてきた。その一方、タルバガに寄生するノミが媒介して、毎夏、草原にタハルとよばれるペストを流行させる厄介ものでもある。

●ゼール

シカに似ているが、枝分かれしない先のとがった角をもっている。モンゴル国自然環境省では、前年の総頭数を調査し、それに基づいて年間狩猟頭数を公表するが、昨1997年は4万頭だった。ツァーガン（白）・ゼールとハルスールト（黒尾）・ゼールの2種いるが、後者は保護動物として禁猟であり、1997年出版『モンゴル・レッドデータブック』によると全国に約8万頭しか生存していないという。元朝時代の養生書『飲膳正要』に「その肉は滋養強壮によい」とあるが、その跳躍力と俊足ぶりを見れば、それもうなずける。

●オオカミ

孤高をまもり威厳すらある動物で、他の野生動物とは一線を画する。「天の生きもの」ともよばれる。モンゴルには「蒼き狼」を族祖とするという伝説があり、また旅の道中でオオカミに出会うと吉兆ともいう。その一方、家畜の最大の敵で、遊牧民の生活をおびやかす存在でもある。家畜の柵にかかしを立てて防いだりするが、ヒツジを襲うときは次つぎとかみ殺す習性をもち、一夜で100頭ものヒツジが犠牲になることもある。オオカミ猟にはそんな尊崇と恐怖・憎悪の感情が複雑にうす巻いているからこそ、男たちを駆り立ててやまないのであろう。

狩猟は自然の再生産に依存するため、継続するにはその摂理にしたがわなければならない。その伝統は自然への畏敬とともにエコ・バランスをこわさない知恵であふれており、今日まで猟師たちの習慣として、一部は近代的な法の形（モンゴル国狩猟法）で生き続けている。たとえば、毛が生えそろっていない、体が十分に肥っていない動物、妊娠したり、出産したばかりの哺乳中のメスは、狩りの対象としない。また冬眠中の動物を狩ったり、群れごと、巣穴で根こそぎ狩るのもタブーである。冬眠から交尾、出産、哺乳、繁殖期には禁猟とされており、タルバガの場合10月中旬～翌8月中旬、ゼールは1月中旬～9月の間は禁猟である。ただし、オオカミだけは例外で、1年を通じて狩りができるし、仔も巣穴も狩りの対象とする。

伝統的な習慣や価値観が激変しつつある現代、娯楽としてのハンティングや商業主義が台頭している。われわれが崇高な自然観をもっていると考えている人びとが平気で自然を汚染し、利益追求のために乱獲や密猟をする。急激な開発の矛盾によって袋小路に迷いこんでしまったわれわれに、アジア的伝統と近代的価値をうまく調和させるもうひとつの道をモンゴルが提示してくれないものだろうか。



上 タルバガ◇ 右上 オオカミの仔◇ 右下 ゼールの群れ◇



草原の遊牧文明—大モンゴル展によせて

1998年7月25日 印刷

1998年7月28日 発行

編著者 小長谷有紀 楊海英

編集者 木村滋

発行者 湯浅淑子

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 財団法人 千里文化財団

〒565-0826 大阪府吹田市千里万博公園1-1

電話 06-877-8893

振替口座 00970-9-317960

©1998 財団法人 千里文化財団 Printed in Japan